

## 赤い蠟燭

新美南吉

山から里の方へ遊びにいった猿が一本の赤い蠟燭を拾いました。赤い蠟燭は沢山あるものではありません。それで猿は赤い蠟燭を花火だと思ひ込んでしまいました。

猿は拾った赤い蠟燭を大事に山へ持って帰りました。

山では大へんな騒ぎになりました。何しろ花火などというものは、鹿にしても猪にしても兎にしても、亀にしても、鼬にしても、狸にしても、狐にしても、まだ一度も見ただけがありません。その花火を猿が拾って来たというのであります。

「ほう、すばらしい。」

「これは、すてきなものだ。」

鹿や猪や兎や亀や鼬や狸や狐が押し合いへしあいして赤い蠟燭を覗きました。すると猿が、

「危ない危ない。そんなに近よってはいけない。爆発するから。」

といました。

みんなは驚いて後込みしました。

そこで猿は花火というものが、どんなに大きな音をして飛び出すか、そしてどんなに美しく空にひろがるか、みんなに話して聞かせました。